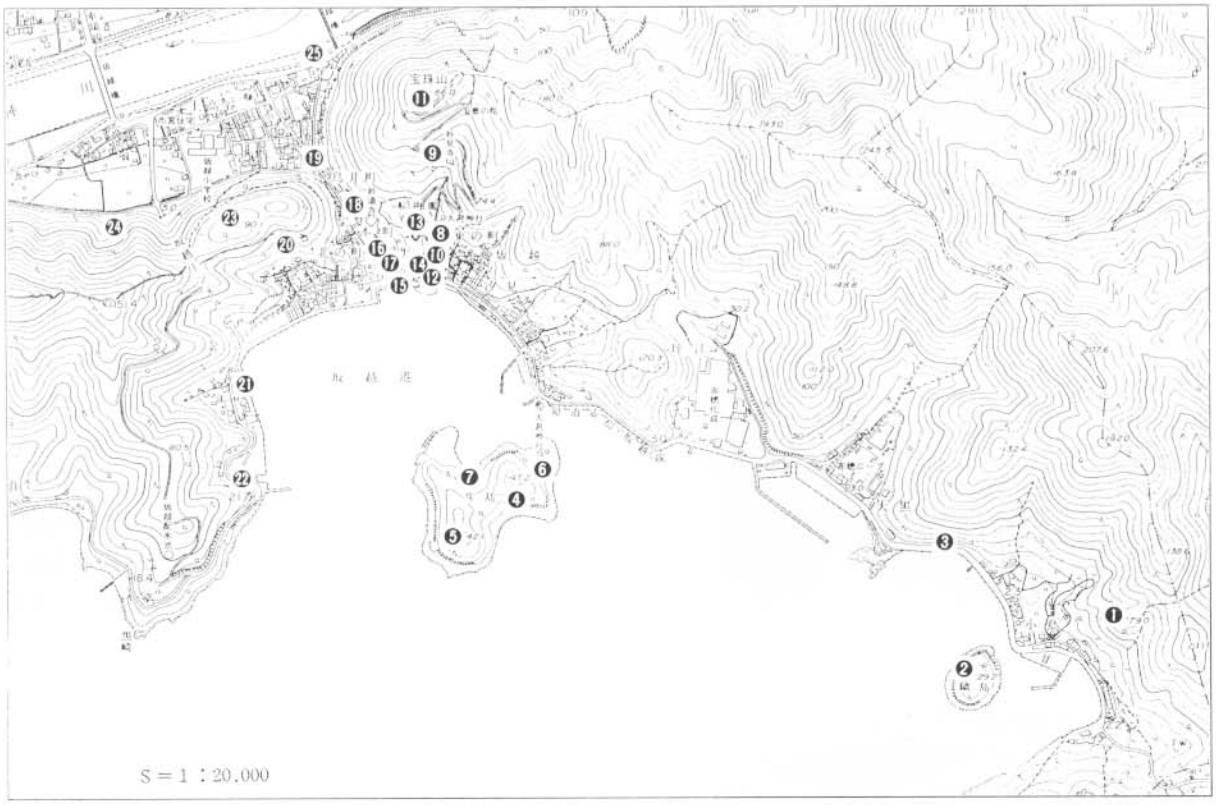
文化財をたずねて　No.3

『坂越港周辺』の史跡めぐり

発行　赤穂市教育委員会
編集　生涯学習課文化財係
（赤穂市加里屋81　TEL 07914-3-6858）



①みかんのへた山古墳

小島の背後の山頂にある古墳時代中期（5世紀）の円墳である。直径約38m、高さ約4.5mの規模を持ち、発掘調査は行なわれていないので埋葬施設等は不明であるが、墳丘には葺石が施され、円筒埴輪や形象埴輪がたてならべられていたことが観察される。昭和50（1975）年、県指定史跡となる。

②鍋　島

小島湾に浮かぶ東西126m、南北165mの小島である。天正15（1587）年6月10日、細川幽齋（藤孝）（1534～1610）が九州名護屋からの帰途仮泊し、出帆しようとして潮流のかげんを水主に問い詠んだ歌が伝わっている。

鹽は早よき程なれや鍋か島　杓子の内へ入れて見つれは

また鍋島山頂に1基の古墳があり、対岸の釜ケ崎周辺にある6基の古墳とあわせて小島古墳群と呼ぶ。これらは横穴式石室を持つものと箱式石棺のものが認められる。

③弘法の井戸

大黒苅又の山裾にあり、海岸に近いところにあるが清水が湧く。水は炭酸水と言われ、眼病によく効いたという。

④生島樹林

周囲1.63kmの小島であるが、古来大避神社の神地として樹木の伐採を禁じられたため、原始の状態をよく保っ

生　島

御旅所・船倉

大避神社

宝珠山妙見寺観音堂

児島高徳の墓

ている。樹種は大部分が常緑樹で、そのなかに落葉樹や草木が混生し、特に蔓生植物が繁茂している点が特徴である。当地方の原始景観やわが国の植物分布における温帯林の限界をみるうえからも貴重な樹林である。大正13（1924）年12月９日、国指定天然記念物となる。

⑤生島古墳

生島の西端山頂にあり、墳形は崩壊・改変が著しいが径20ｍ前後の円墳と考えられる。大避神社の祭神である秦河勝（はたのかわかつ）の墳墓と言い伝えられているが、古墳時代前半期の古墳であろう。また、生島の南斜面に崩壊した横穴式石室を持つ小墳２基が存在する。

⑥御旅所、船倉

御旅所は享保４（1719）年12月に再建されたもので、内陣１間半四方、外陣３間四方、立３間の規模を持つ瓦葺の仏教様式の建物である。祭礼に際しては内陣に神輿が安置されて神事が執り行なわれる。船倉は元文元（1736）年の建築で、祭礼用和船を保管している。船倉と祭礼用和船は昭和60（1985）年３月26日、県指定有形民俗文化財となる。

⑦生島の船井

船乗りが毎日水を汲んでいた井戸で、坂越三井の一つである。

⑧大避（おおさけ）神社

祭神は秦河勝・天照皇大神・春日大神である。神社の創立時期は明らかでないが、播磨国総社縁起によると養和元（1182）年に祭神中太神24座に列せられ、当時すでに有力な神社であったという。現在の本殿は明和６（1769）年、拝殿と神門は延享３（1746）年に再建されたものである。拝殿両脇の絵馬堂には40余りの絵馬が掲げられており、中でも享保７（1722）年の舟絵馬は最も古い舟絵馬として貴重なものである。秋に行われる祭礼、坂越の船祭りは平成４（1992）年２月25日に国の選択無形文化財となっている。

⑨宝珠山妙見寺観音堂

宝珠山妙見寺は真言宗古義派の寺院であり、寺伝では天平勝宝年間（749～757）に行基が開基し、のち大同元（806）年に空海が中興したと伝えるが明らかではない。嘉吉の乱（1441年）までは宝珠山の山腹にかけて16の坊舎と９の庵があったが、その後の文明17（1485）年の僧兵一揆により焼失したという。

観音堂は萬治２（1659）年に宝珠山中腹に建立され、「円通閣」とも呼ばれたが暴風のため大破し、享保７（1772）年に現在位置に再建された。

⑩宝珠山妙見寺妙覚院跡

宝珠山妙見寺の本坊であり、文明17（1485）年の焼失の後、明応３（1494）年に乗叶（じょうう）が再建したという。その後坊舎は明治６（1873）年に坂越の初の小学校「松風校」校舎として使用されたが、小学校校庭整地のため明治41（1908）年に観音堂下に縮小移築さ

れた。しかし昭和58(1979)年に老朽化のため大雨で倒壊し、現在では天保3(1832)年に再建された山門が残るのみである。

⑪茶臼山城跡

宝珠山山頂にあったというが、現在ではその遺構は認められず、わずかに数基の石仏が祭られているにすぎない。嘉吉の乱(1441年)の後、赤松氏を滅亡させた山名持豊が赤松の残党に備えてここに駐留したといわれているが、詳しいことはわからない。

⑫御番所跡・坂越浦城跡

坂越浦城は宝珠山山麓の標高20mの上ノ山と呼ばれる小丘にあり、『播磨鏡』では城主は赤松村秀という。江戸時代にはこの場所に赤穂藩の御番所が置かれ、坂越浦に出入する船の監視に当たった。

⑬児島高徳の墓

児島高徳(こじまたかのり)は『太平記』によれば新田義貞とともに足利尊氏と戦い、妙見寺で傷を癒し各地を転戦し、晩年坂越で没したという。船岡園中に児島高徳の墓と伝えられる五輪塔があるが、五輪塔自体はその特徴から考えて近世初期のものである。

⑭小倉御前の墓

坂越浦城のあった上ノ山の南面の崖に南朝方の皇族である小倉御前の墓と伝えられる数基の五輪塔が祭られている。このうち大きい2基は南北朝から室町初期のものである。

⑮旧坂越浦会所

天保2～3(1831～1832)年にかけて建築され、明治まで坂越浦の会所として使用されたほか、赤穂藩主も来浦の際は休憩所として使用した。のち昭和5年(1930)年に大改造され、坂越公会堂として使用された。平成5～6(1993～1994)年にかけて解体復元整備を行い建築当時の姿に整備され、一般公開されている。この建物は藩の茶屋的機能を合わせ持った大規模で希少な会所建築であるばかりでなく、その建築年代が明らかなうえ豊富に残された会所日記から当時の村落運営なども知ることができる点において重要な意義を持つものである。平成4(1992)年4月30日、市指定有形文化財となる。

⑯奥藤家・奥藤家酒倉・奥藤酒造郷土館

西国大名の本陣にあてられた家屋は築後300年といわれ、複雑な平面形をもつ大規模な入母屋造りの建物である。酒倉は寛文年間(1661～1673年)の建築で、高さ2mにおよぶ石垣による半地下式の構造が今も保存されている。郷土館は酒造・廻船・漁業関係の資料が展示されている。

⑰大 道 井

海雲寺の寺井・生島の船井とともに坂越三井のひとつである。文化年間(1804～1818年)に掘りかえを行った井筒普請記録によれば屋形もあったようである。昭和35(1960)年の道路拡幅のため地上より姿を消し、石の井戸枠だけが現地に保存されている。

小倉御前の墓

旧坂越浦会所

奥藤家周辺の町並み

光明山妙道寺

木戸門跡礎石

⑱光明山妙道寺

茶臼山の南麓にあり、浄土真宗本願寺派に属する。享禄5(1532)年に善祐門徒学西(がくさい)の開基という。本尊の阿弥陀仏の木造は寛永9(1632)年2月18日に高砂沖で漁網にかかったものを奥藤又次郎が受けて本堂に安置したものと伝えられる。本堂は享保19(1734)年に、山門は宝暦3(1753)年にそれぞれ再建され、鼓楼は寛保2(1742)年に、鐘楼は寛延2(1749)年に建立されたものである。

黒崎墓所

⑲木戸門跡

現在の高谷駐在所前にあたり、その礎石2個が今も駐在所の敷地に残っている。いつ頃設置され、いつ撤去されたかは不明だが、坂越浦の治安維持のため設置され、番人を配して罪人が出た時は門を閉じて検問を強化し、夜間(亥の刻)には閉じて通行を遮断したという。

⑳海雲寺の寺井

霊亀山海雲寺は宝珠山妙見寺の末寺で、天文年間(1532～1555)に廃寺になったという。現在付近に残る井戸は寺井と呼ばれ、坂越三井のひとつに数えられる。

雲谷山常楽寺

㉑湊造船所

県指定有形民俗文化財となっている大避神社祭礼用和船をはじめ、木造和船の新造・修復を一貫して行うことができるのは現在では湊隆司氏ただ一人であり、昭和59年(1984)年3月31日に市指定選定保存技術保持者となっている。

㉒黒崎墓所

江戸時代に上方と瀬戸内・日本海を結ぶ西廻り航路の成立とともに、坂越は諸国廻船の入港盛んな地となった。それに伴って航海中坂越浦海域で海難や病気などによって客死するものもあって、湾の西南端黒崎の地に彼らの墓所「他所三昧」(船三昧)が造られた。妙道寺に残る過去帳や関係浦状・取置証文などによると宝永3(1706)年～文久2(1862)年の間に判明する埋葬者は134人で、その出身地は南は薩摩の種子島、西は対馬、東は伊勢・尾張・伊豆、日本海側では丹後・越後・出羽など27カ国に及ぶ。平成3(1991)年3月30日に県指定史跡となる。

㉓八祖山経塚

八祖山の尾根のほぼ中央にあり、小さな石を積み重ね直径7～8m、高さ約2mを測る。経筒かと思われる土器片が出土しており、平安末から鎌倉時代のものと思われる。

㉔雲谷山常楽寺(うんこくざんじょうらくじ)・吾有禅師(ごゆうぜんじ)の墓

赤穂郡大領高屋越前二郎為経(ためつね)の常楽庵にはじまり、その後子孫の高屋先生(せんじょう)源景義が正中元(1324)年に京都の東福寺の渓深(けいしん)首座に請うて禅院とし常楽寺と改号しよく栄えたという。しかし天文年間(1532～1555)に信徒が改宗したり、慶長(1596～1615)の初めに坂越荘三カ村を領した浮田安心がたとえ寺社領であってもみだりに山林田畑を押領したため衆僧離散して廃寺となった。その後、元禄15(1702)年、明和7(1770)年の二度にわたり小堂が再建される。

境内には吾有禅師の墓がある。吾有禅師は本名は松本和右衛門で、もと高松藩士であったが剃髪して吾有玄道といった。坂越では妙道寺に住み多数門人に和歌や絵画、禅道を教えた。文化11(1814)年に讃岐で没するが、門人らが常楽寺境内に墓石を立て遺品の鉄鉢と十徳を葬る。

㉕高瀬船着場

高瀬船は18世紀には坂越村に着岸していたことが知られており、以後内陸部との流通の重要な役割を果たした。内陸部の薪などの物資を坂越で陸揚し、大八車などで鳥井坂を越して坂越港へ運び大阪方面への廻船に積み込んだという。

(調査協力)大西　孜、　唐崎安也

次号は、『旧上水道の史跡』めぐり